S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション
前期：キリスト教と近代的知
後期：方法論的考察と聖書の社会論
オリエンテーション
Ⅰ：象徴・言語・システム
　１．象徴・言語１
　２．象徴・言語２
　３．象徴・言語３
　４．システム・宗教
Ⅱ：レトリック・メタファー
　１．レトリック・メタファー
　２．メタファー・モデル
　３．イエスの譬え
Ⅲ：コミュニケーション・解釈
　１．伝統と意味の地平
　２．多元性と対話
　３．イデオロギーとユートピア 12/14
Ⅳ：宗教と文化――構造と動態 1/18

Ⅰ：象徴・言語・システム

１．象徴・言語１
２．象徴・言語２
３．象徴・言語３
４．システムと宗教

Ⅱ：レトリック・メタファー

１．レトリック・メタファー
２．メタファー・モデル
３．イエスの譬え

Ⅲ：コミュニケーション・解釈

１．伝統と意味の地平

＜言語・隠喩・モデル・譬え＞
・言語と行為（倫理）・経験
・意味と指示
　↓
（１）近代的思惟の状況
１．歴史主義と反歴史主義との対立とその後
　歴史と構造の弁証法、リクールの言述の弁証法
　↓
「宗教」を問う枠組みとしての言語論と意味論

２．カント以降の宗教哲学：人間学的転換とその帰結

・実証主義的科学とそれに還元されない学の探究

・形而上学的思惟の復権の試み

ウィリアム・ジェイムズ、ホワイトヘッド、トレルチ

・形而上学から倫理・価値論へ、そして言語論と意味論に基づく存在論・人間学へ

（２）価値論から意味論へ

３．新カント主義と神学におけるカント主義（価値論・価値哲学）

４．意味概念の包括性と人文・社会学的な基礎論の存在

構造としての意味（客観性）、生・経験としての意味（主観性）、

社会性としての意味（相互主観性）＝コミュニケーション的意味

５．波多野精一（『宗教哲学』）：アガペーとエロースとの差異

他者・個／価値・普遍

哲学的人間学、現象学、存在論、対話の哲学、ハイデッガー、ブーバー

６．ティリッヒ：宗教理解における近代的な人格主義の限界、価値概念の限界。

７．意味概念

意味と指示との区別あるいは関係

（３）意味から歴史へ

８．歴史的生成の前提としての構造・体系と、体系の歴史的生成

９．解釈学：意味と歴史から人間存在へ

方法の学から存在の学へ：Schleiermacher から、Dilthey を経て、ハイデッガーへ。

Rudolf Bultman, Das Problem der Hermeneutik, 1950. (*Glauben und Verstehen*, Zweiter Band, Paul Siebeck,S.211-235.)

Voraussetzung jeder verstehenden Interpretation ist *das vorgängige Lebensverhältnis zu der Sache*, die im Text direkt oder indirekt zu Worte kommt und die das Woraufhin der Befragung leitet.

von einem gewissen *Vorverständnis* der in Rede oder in Frage stehenden Sache getragt ist. (227)

10．ハイデッガー、*Sein und Zeit*（Max Niemeyer, 1972）

世界：意味連関と時間性→歴史性

Als-, Vor-struktur：理解の地平としての意味（連関）

Sinn ist das durch Vorhabe, Vorsicht und Vorgriff strukturierte Woraufhin des Entwurfs, aus dem her etwas als etwas verständlich wird. (151)

11．ガダマー：意味の地平と地平融合（Horizontverschmelzung）

Die Dialektik von Frage und Antwort

die im Verstehen geschehende Verschmelzung der Horizonte die eigentliche Leistung der Sprache ist. (359)

12．伝統概念の再構築、宗教と意味の地平

→　原子的個体的な宗教ではなく宗教的伝統へ。

宗教の動態：個、決断・逆説、瞬間

共同体、伝統・文化、プロセス

S. Ashina

13. 伝統の特殊性と理性の普遍性
ガダマーとハーバーマス
↓
テキストの前の自己理解とイデオロギー批判の相補性
言語世界の内部（意味連関）と外部（作用連関）

Ⅲ：コミュニケーション・解釈

２．多元性と対話

（1）言語世界とその外部をめぐって

１．一切は言語的である。これはいかなる哲学的根拠を持つか。
これはいわば言語の事実性に依拠した立論。論理的には循環論。
人間的思考の条件、自明の基本命題の存在（ウィトゲンシュタイン）
cf. キリスト教思想をこの問題において読むどうなるか。
創造と終末の間の存在と言語、三位一体論。
↓
２．伝統における理解、理解における伝統の継続
理解の地平としての意味、地平融合としての理解
３．では、伝統批判は可能か（伝統の転換の可能性）
資本主義社会において共産主義をいかに構想できるか
（市民はいかにして革命家となるのか）
慣習的知恵に対する転換的知恵の根拠はどこに。
cf. 科学革命と通常科学（T・クーン）
「科学」は進歩するのか。
４．人間存在の側の条件（アプリオリ？）として
構想力（個と共同体のそれぞれ、あるいは相互の連関）
カント→ハイデッガー
経験とデータの蓄積（「問い」の発生）
伝統外部への通路
↓
５．人間存在の側の条件（歴史的）として
伝統内部の多元性と諸伝統の多元性
cf. 啓示相関（Offenbarungskorrelation）
啓示と信仰の相関が不可分の原現象である。
問いと答え
受動（受容可能性）と能動

（2）意味の地平と多元性

６．意味の地平の非完結性と多元性（意味の断片）
歴史の非完結性（終末以前、間の時代）

首尾一貫した連関を破る様々な断絶・溝の存在

↓

意味と理解の成立には、「地平融合」とは別の形式での関連性が存在しなければならない。

諸伝統の相互関係・対話の成立の場

意味論と終末論（終末と先取り）

７．これは、啓蒙的理性の理想に対応するものか？　人間の生物学的条件から？

↓

形式性における普遍的前提としての言語

言語・意味は、存在論的概念である。

討論・対話の形式的条件としての語用論

ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

８．理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先取り＝終末論

コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論

相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的関係

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

↓

現実のコミュニケーションの成立の場：

「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」

つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。

cf. オートポイエーシス（自己組織化）のパラドクス（10/26 の講義）

↓

真理とは何か：真理の合意説

９．Jüegen Habermas, Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie (1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984, S.11-126.

Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.

Wolfgang Pauly, *Die geschitliche Entwicklung religiöser Deutungssysteme. Die Erkenntnistheorie von Jürgen Habermas und ihre theologische Relevanz*, Saarbrücken, 1989.

Martin Jay, *The Dialectical Imagination. A History of the Franhfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973.

Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.

10．多元的状況下での課題としての対話（理解の一形式）

宗教間対話：理論的解明（哲学的・神学的）と実践的手続き

ティリッヒ（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。）

S. Ashina

1) 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論

比較という作業：三位一体論の位置（多神教、一神教、三一神教的一神教）

Systematic Theology. vol.1, 218-230.

↓

比較を通した理解の深化

キリスト教と仏教との比較・対話

1) 相違：神の国と涅槃、政治的共同体的象徴と個人的存在論的象徴

倫理と神秘主義

cf. ヒック：人格／非人格

2) キリスト教における存在論的神秘主義的要素の発見

3) 宗教経験の類型論から要素論へ、そして構造論へ。

2) 対話をめぐる諸問題

・対話の条件： *Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

（Paul Tillich. Main Works, 5）, p.313

対話の名に値する対話であるために

(a) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。

(b) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。

(c) 共通基盤（common ground）の存在。 cf. common basis：統合の基盤

(d) 相手の批判に開かれていること。

・対話の意義（何のための対話か？）あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解＝現象学と外部を媒介した自己理解＝解釈学

↓

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

→自己のユニークさは実態論的な出発点ではなく、対話の過程で発見され、構成されるもの（＝課題としての自己、自己に「なる」）。

・対話の主体

個人／共同体／思想 → 科学と宗教の対話の場合

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で

解放の神学、あるいはキリシタンの場合

基礎的共同体（Pieris, the basic communities）

組・講（狭間芳樹「近世における民衆と宗教――キリシタンと一向宗」、芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房）

現代日本、現代の東アジアでは？

スピリテュアリティ・個人主義以降の共同性

↓

個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。

人格と共同性（再び、ティリッヒでは、個別性と参与の両極性）

↓

（３）展望――自己と他者、あるいは我と我々

11. 伝統・意味の地平の多元性（多）が捉えられる場はどこにあるか。
終末論的地平としての形式的意味性とそれを信念として共有すること。

12. 自己と他者の弁証法
自己の内なる他者と自己の内的な多元性
リクールとその後の自己論

↓

芦名定道「『アジアのキリスト教』研究に向けて――序論的考察」
『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第８号、2010 年、pp.79-104、特に注(28)を参照。

Léon Turner, *Theology, Psychology and the Plural Self*, Ashgate, 2008.

1 The Crisis of Identity: Diagnosing and Healing the Frangmented Self
2 The Destabilisation of Identity in Contemporary Social Thought
3 The Problem of the Self and its Represetation
4 Experiential Multiplicity, Narrative Identity and Pathologies of Self
5 The Unity of the Person and the Doctrine of Imago Dei
6 Pannenberg and McFadyen in Dialogue with Psychology
Conclusion: Reconfiguring Theology's Dialogue with Psychology

13. 「我々」とは誰か？　我々はどこに成立するのか？
現代神学の弱点（cf. 森田雄三郎）
辻村公一
「私のテーマは、ヘーゲル的な「吾々にとって」(Das Hegelische "für uns") である」、「その問は、ヘーゲル的な表現である「吾々にとって」といはれる場合の「吾々」とは何者であるか、といふことである。」
「Ⅳ　ヘーゲル・「吾々にとって」」、辻村公一『ドイツ観念論断想Ⅰ』創文社、1993年、149−171頁。

↓

構想力の社会的次元あるいは社会的構想力へ
イデオロギーとユートピア